

見解に比して、それを魏代に製作の中心期があるとする説のより有力であることの傍證として、可なり重要な役目をなすものと信ずる。而して從來數へられた同じ様な資料を併せ観ることに依つて

同式鏡の年代觀が自ら表はれ來るのである。紹介を終るに當つて私は此の有益な資料の提供者たる小場恒吉氏と守屋孝藏氏とに謝意を表したい。

日本海沿岸石器時代遺跡の地理學的考察(上)

文學士 小 牧 實 繁

史前地理的研究が地理學考古學の兩分科に關係し兩者間の連鎖となる事は、歴史地理的研究が地理學歴史學兩分科に關係し兩者間の連鎖となると同一轍で、史前地理的、歴史地理的兩方面の研究を綜合統一したる地理的研究の一分野が地質學上所謂第四紀時代の研究と密關係を有し斯くて又地理學地質學の兩分科に關係し兩者間の連鎖となる事は吾人の言を俟たずして明かであるが、此の意

味に於て地理學は史學考古學と三者相對立し相提携する鼎足にも比すべく又史學考古學地質學三補助學科の上に立つ鼎彝にも喩へつべく、史學なく考古學なくしては斯の地理學は有力なる提携者を失ひ、史學考古學地質學の援助なくしては斯の地理學は存立しない。地理學殊に文科的地理學に於ては宜しく史學考古學地質學上の知識を加味利用すべきである。之れ余が年來私かに抱く意見であ

り此の考へは余が學問上の立脚點、研究上の出發點で、斯の地理學の充實擴張大成が余が年來の宿志、將來の目的であるが斯かる考案の下に余は先づ主として本邦特に日本海沿岸をフィールドに採り殊に潟及び砂丘地方に興味を寄せ其の地質學的、史前地理的、歴史地理的研究に着手したのである。

日本海沿岸の沖積地が高大なる砂丘に縁ざられ多數の潟に富める事は確かに該海岸の一特徴であると思はれる事は本年七月號の「歴史と地理」誌上に論述せる所で其の地質學的歴史地理的史前地理的研究の一端は既に同誌及び「地球」誌上に發表した所であるが其は主として加賀以南の北陸及び山陰の海岸に關した事で地理的には未だ加賀以北に説き及ばさなかつた。然るに其の後の研究により加賀以北に於ても越後及び羽後の海岸は亦此の特徴を具有するもので地理研究上興味ある地方

であり、中に就いて紫雲寺潟八郎潟附近の地質學的、史前地理、歴史地理的研究殊に史前地理的研究は其れ自身甚だ興味あるものたるのみならず、沿岸石器時代遺跡遺物の物語る事實は亦他の海岸地方研究に好參考資料を供するもので其の研究は稍地方的に偏するの傾きはあれど又多少の意義なしとせぬ事が明かとなつた。本稿に説述する所は紫雲寺潟八郎潟兩者附近の史前地理的研究の一端であるが若し之れが他の海岸沖積地の研究に何等かの暗示を與へ得るならば實に望外の欣びであるから以下多少の煩を厭はず本研究の端緒をなせる二つの潟沿岸の石器時代遺跡の踏査に筆を起し其の概略を説明したる後進んで其の史前地理に言及する事とする。讀者は幸に五萬分一地形圖村上十ニ號中條、新潟九號新發田、同十三號新潟、(二萬五千分一地形圖ならば更に可)男鹿島一號船川を參照せられん事を望む。

本年八月十八日より九月十七日に至る約一ヶ月間の旅行中余は地理研究上興味ある二つの潟沿岸の石器時代遺跡を踏査した。一は越後國北蒲原郡金塚村字貝塚、他は羽後國南秋田郡潟西村字角間崎の遺跡之れである。前者に就いては既に齋藤秀平氏が考古學雜誌第八卷第二號に簡單ではあるが報告を寄せられ、後者に就ては武藤一郎氏が人類學雜誌第三十七卷第一第二第三號に詳細なる研究報告を載せられた事であるが余は此等兩遺跡に對しては地理學上の見地より別箇の興味を有したので踏査を試み兩遺跡より多少の遺物を採集する事が出来たのである。

八月二十四日午前金塚驛着驛員より遺跡踏査には貝塚村宮下氏を訪問すべきを教へられ貝塚を指し行く行く附近の地質地形を觀察するに貝塚村北部の丘陵は下部砂層、中部礫層、上部砂層の偽層(cross-bedding)よりなり、之は所謂洪積層となす

べきものなるを思はしめた。小徑を南に折れ沖積層田圃中を經貝塚洪積層臺地を上つて南に下り宮下銀六氏を訪れ先づ遺物發掘の經過を質し後遺物を一見する。氏の談によれば明治二十三年頃故坪井博士は貝塚の地名より推し此の地の石器時代遺跡地ならん事を想定し踏査せられたが獲る所なくして歸られた。然るに明治三十八年頃開墾のため表土を掘り下ぐるや果然石器土器が發見せられ貝層が露出した。勿論其れ以前とても貝の存在は知られて居たが開墾により貝層は宮下氏所有の土藏の屋根に隣れる小高き島的一端より幅四―五尺厚さ同四―五尺の層をなし北方に走つて居るのが明かとなつた。而して開墾の爲之れを曝露するや貝殻は概ね破壊せられて石灰の如くなつた。然しながら氏の記憶によれば其は蛤及び蜆の大なるものゝ二種であつた。其の後大正四年鳥居龍藏氏も此所を踏査せられたとの事である。宮下氏所藏の完

形遺物として殘存するは唯灰白色フリント打製雁股彎曲度の小なる石鏃一箇のみで他にはフリント及び Haematite quartz の破片が保存せられて居るに過ぎず遺物の大部分は金塚村小學校に保存せられて居るとの事であつた。

宮下氏邸を辭し氏の東道によつて遺跡現場を踏査する。茲に遺跡地の詳説を試みるに先だち附近の地質地形の一般を概説するが便宜であらう。

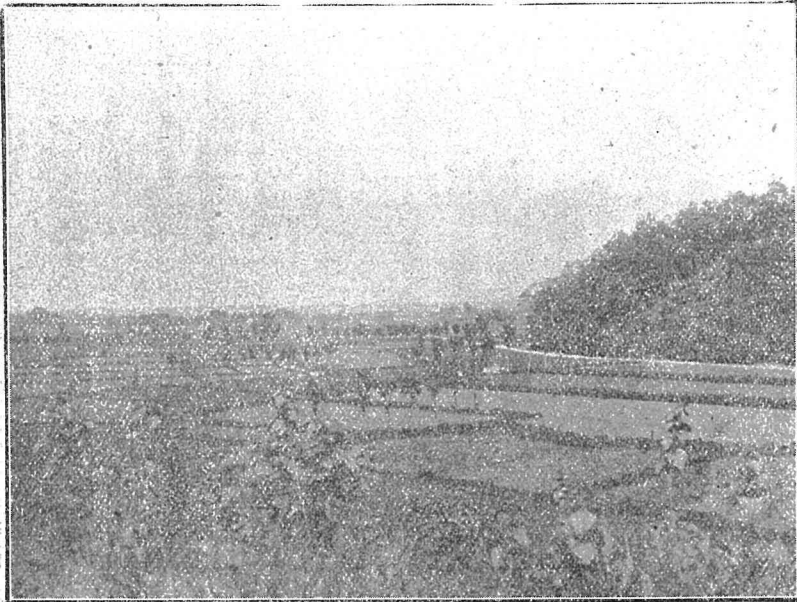
遺跡地は日本海海岸と略平行に南西より北東に連亘する第三紀層丘陵の西邊に當り、該丘陵より一段低く丘陵の邊縁を縫ふ洪積層臺地上に存し、該洪積層臺地と日本海との間には平坦なる沖積層の水田が開け、更に水田と外海との間には幅二千乃至四千米、高度三〇・三米を最高點とする砂丘帯が延び碧海と緑田とを劃して居る。遺跡地の局所を細叙せんに該洪積層臺地は南面は緩慢なる傾斜をなせる鞍部を隔て、更に南方臺地に續き該斜面に

貝塚村聚落が發達し聚落の北方は稍平坦なる島地となり桑、麻、大根、葱、豆、牛蒡、茶等が栽培せられて居るが其の北端は急に八米許の崖をなし水田面に臨んで居る。該島地の一前に以前諏訪神社が存し其地は今も諏訪屋敷と遺稱せられて居るが、石器の出土は其の西隣の島地からであつた。臺地基盤は砂礫の混合層よりなるが島地は充分耕され礫は多く除去せられ又腐植土を混じて居る。遺跡地地形の説明は大體之れ位で充分と思ふが尙不足の點は挿入の寫真によつて補ふ事とし度い。第一圖は諏訪屋敷より西方を向ひ遺跡地を望んだ所、第二圖は遺跡地より北四五度西、金塚村小學校の方向に向ひ臺地下の沖積地、右手に小徑を隔て、貝塚北方の洪積層臺地、遠景に海岸砂丘地を隔て、日本海を望んだ所、第三圖は遺跡地より西を向ひ同遺跡地の一部、右手遠景に沖積地、砂丘を隔て、日本海を望んだ所、第四圖は臺地下水面よ

第一圖



第二圖



第 三 圖



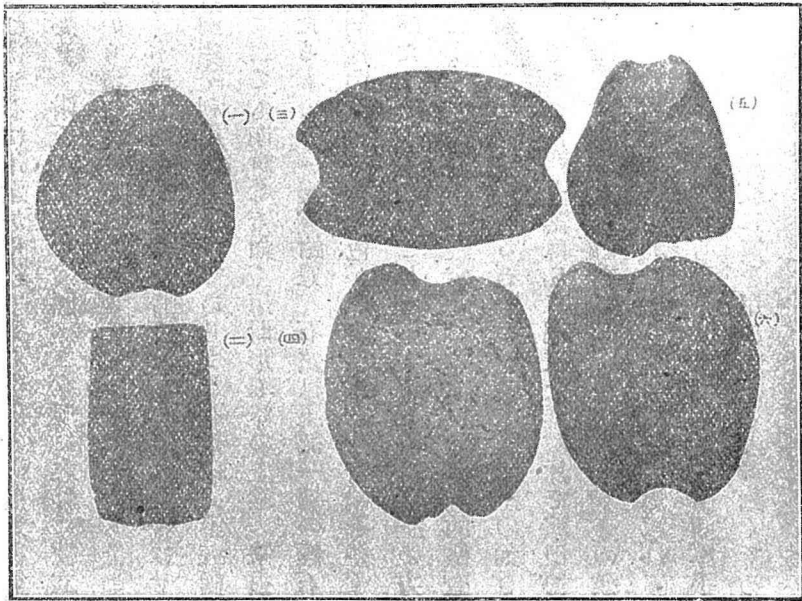
第 四 圖



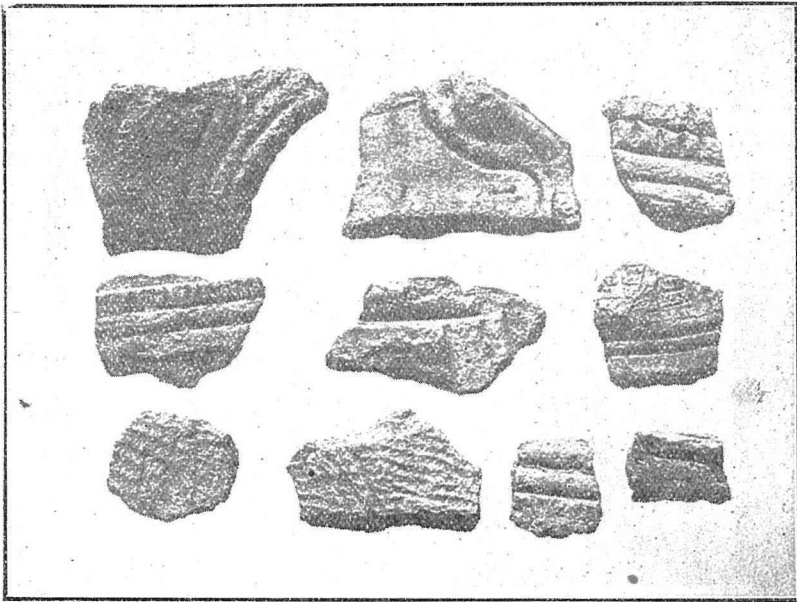
り南四五度東を向ひ遺跡地洪積層臺地の側面を望んだ所（臺地の水田面上高度は約八米である事前述の如くである）である。

此の臺上遺跡地に於て宮下氏、氏の同伴者及び余の三人は開墾の際掘出され畠地の畔外又は臺地崖下に遺棄せられた石器土器として二十餘の錘石一個の石斧並びに多數の土器破片を採集した。多數の錘石は何れも遺跡臺地及び其の北方の丘陵を形成する砂礫層中の圓礫中比較的扁平なるものゝ相對する二方を打缺き作つた者なる事現場に於て之れを明かにする事が出來た。其の内の一個（第五圖一）で附近の地層中に見馴れぬ圓礫として教室に持歸れるものを地質學教室の本間助教授が一部打缺き肉眼的の鑑定をせられた所によれば其の石質は閃綠玢岩（Dioriteporphyrie）であつたが（顯微鏡的研究未済）恐らく此の種の圓礫も又附近砂礫層中に稀には存在するものと考へられる。何と

第 五 圖



第 六 圖



なれば錘石は用途が用途であり特別の硬度比重等を要せず附近有合はせの圓礫で立派に之れに役立つから特に遠方より持來るの必要もないからである。本遺跡地の錘石は恐らく殆んど附近有合はせの圓礫を利用したものであらう。石斧は(第五圖二)にても明かなる如く短冊形石斧の上端の缺損したるもので磨製、蛤刃、石質は上記一個の錘石と同様閃綠玢岩で唯色が前者に比し稍青味を多く帯びたるを小異の點として居る。(石質は同上の方法による本間學士の鑑定による、但顯微鏡的検査は未了)現場に於ける石器類の拾遺は以上の如きものであつた。土器は凡て繩紋土器破片で濱田博士、梅原、島田兩氏の査定によれば恐らく壺の破片らしく其の内に明かに把手及び底部と思はれる部分が存し、形式から云へば鳥居博士の所謂厚手派式に屬し、施紋に篋を用ひたるものゝ如くである。(第六圖參照)

現場に於て余等の採集せる石器土器は以上の如きものに止り蒐集としては甚だ貧弱であるが、此の地の石器時代遺跡地たるの證據物としては其れのみにも充分である。而して此の地が嘗て貝殻を出だし其の故を以て貝塚の地名を付與せられたと思はれる上に宮下氏の談の如く明治三十八年頃開墾の際實際に貝殻を出したとすれば本遺跡の性質は略見當が着く譯であるが慾を云へば私共としては尙貝殻の實的證據物が握り度かつた。之れは宮下氏も云はれた如く既に開墾の際發掘せられ破壊せられて石灰と化し去つたのであつたから事實困難の事と思はれたのであるが實地踏査に當り余等は幸比較的保存のよかつた二片の蜆貝殻を採集する事が出来たのである。之れは種^{ズベールム}の區別に重要な狙ひ所となる諸局部が殆んど全く磨滅して居るので絶對的の種の決定は困難であるが地質學教室の貝類學者黒田德米氏の鑑定によれば恐らく

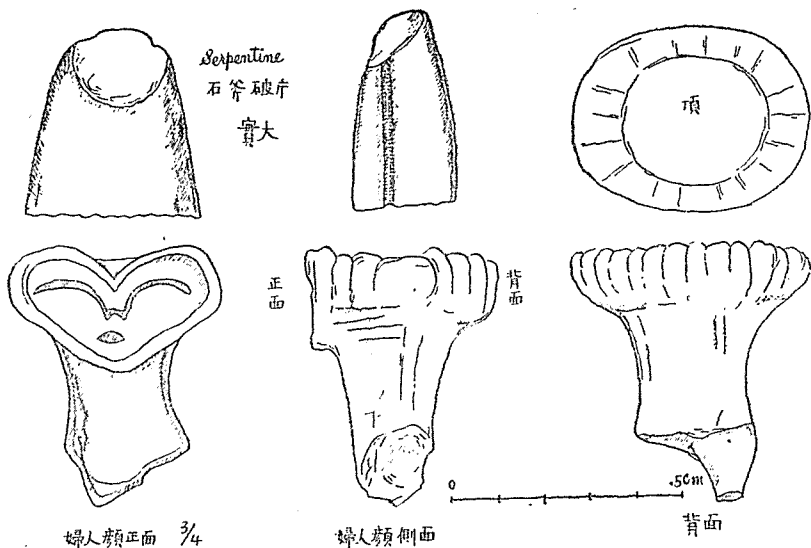
日本蜆即ち *Corbicula nipponensis* (?) Pilsbry であらうとの事で蜆貝である事だけは確かであり之れは蛤などと共棲し得るものである。兎も角本遺跡が貝塚遺跡である事は該蜆貝の出土によつて明かな譯である。

遺跡地を辭し宮下氏の案内によつて金塚村小學校保存の貝塚發見遺物を一見する事が出来た。此處に保存して居るものは石鏃石鎗類二十一、石棒(?)一、完形石斧一、石斧破片一、繩紋土器破片五、土偶二であつて此の外に原始曲玉の粗造品が存したとの事であるが今はない。尙遺物ではないが遺跡地出土の黒曜石、及び脈石英 (Vein quartz) の白色透明度の大なるもの及び乳白色半透明で瑪瑙に似たものも保存せられて居る。此は恐らく石器製作の際に於ける原石破片とも思はれるから書添へる。石鏃石鎗類は灰白色、白色、褐色、赤紫色の燧石、黒曜石、玄武岩等で作られた打製品で

石鏃の形式は三角形、柳葉式、雁股式、有柄式等である。完形石斧は石質は多分蛇紋岩であつたと記憶するが備忘録不備の爲確かには云へぬ。石斧破片は蛇紋岩磨製品で形式は第七圖に見る如くである。石棒(?)は玄武岩の柱狀節理を利用して作られたと思はれる長さ五寸許の五角柱である。土器破片は余が教室に持歸れるものと同形式のもので鳥居博士の所謂厚手派式に屬するものであり、土偶は一個は婦人の胸より上部腿より下部を缺ける原始的のもの、他の一個は同じく婦人の頭部と思はれるもので其の形は第七圖及び第八圖に見る如くである。

遺物の説明は此の位に止める。實際遺物其れ自身は大して興味あるものではない。恐らく既に各所の石器時代遺跡より記載せられたものゝ類品で、考古學上特に新しい材料を供するものは少ないであらう。強いて言へば玄武岩の柱狀節理を利

第七圖

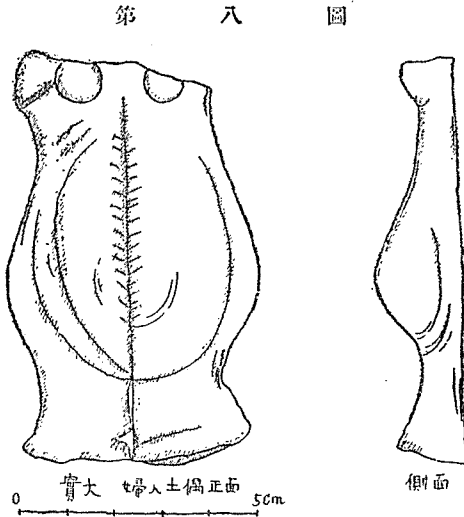


婦人類正面 3/4

婦人類側面

背面

用して作つたかと思はれる石棒(?)位が稍珍らしいものと思はれる位である。寧ろ我々をしてより大なる興味を起させるものは此等遺物の出土が示



す事實である。即ち地理學上の見地より特に興味深き事實は本遺跡より多數の鍮石及び蜆貝が出土した(宮下氏に據れば多量に、而して蛤も)事實で

ある。此の事實こそ我等地理學の徒には特に重要にして興味あるもので舊紫雲寺瀉の石器時代に於ける情態の考察上一の重要なる手掛りとなり、又新潟北部に於ける海岸砂丘生成年代の考察上一の傍證となるのである。

新潟市の東北部、福島瀉より更に北部に當り舊紫雲寺瀉なる瀉湖が存し、其れが徳川時代の中葉享保年間功利的氣運の高潮時代に當り人工を以て埋立てられた事は吉田東伍著大日本地名辭書所引天保九年小川氏舊記、北越雜記、名寄補、及び同氏遺著日本歴史地理の研究所收「溝口家の治水墾田事業」(同氏遺著越後の歴史地理にも收む)越後の歴史地理所收「加治川の變遷附紫雲寺瀉福島瀉の沿革」等の諸論文の所説及び宮下氏所藏の紫雲寺瀉古圖等によつて明かであるが該紫雲寺瀉が石器時代に於て如何なる範圍まで擴まりしやは興味ある地理的研究の一題目であるが今本遺跡より石

器と共に鍾石及び蜆貝を出土するの事實によつて當時に於ける舊紫雲寺潟の範圍は大體の見當が着くと思ふ。石器時代の貝塚が直ちに當時の汀線を示すものと無條件に判定し去る論者の説に對しては余は多少の異論を挿むもので場合によりては貝塚と汀線との間には石器時代に於ても尙幾何かの距離が存したるやも知れず極端に云へば貝塚の存在若しくは他の遺物と共存する鍾石の包含は石器時代に於て少くとも該地點まで陸地であつた事實の證據としかならず海、湖、潟の汀線が其の地點に存せる證據とはならないとの意見を有するものであるが、此の場合に於ては本遺跡地は石器時代に於ては潟の沿岸に當つて居たと思ふのである。然しながら此の考へは單に貝殻及び鍾石を發見したからとの簡單なる一理由のみから出たのではなく之れには多少地質地形上の證據が存するのである。

地質上の證據とは洪積層臺地下沖積層の水田中から多くの炭化物が出土するの事實である。宮下氏の言によれば貝塚の西方田圃(苗代)中より栗の木と思はるゝものゝ炭化したるものが多數に出土したとの事で(其の埋没状態は多く尖端を北方に向けて居たとの事)、余は現に氏がその一部を以て手箆笥の戸を作られたるを見た。之は恐らく舊紫雲寺潟底部に漂木の沈積したるもの即ち胎内川、加治川等の流出したる樹木の潟底に沈積し埋没せられたるものではないかと思はれる。(此れが津浪等と關係あるものなりや、否やは他日考へる)後にも記す如く地形上より考へ舊紫雲寺潟は此の附近まで擴まつて居たと考へて毫も不可ないのであるから尙更該炭化物が舊潟底沈積物ならんとの考へは眞實らしく舊紫雲寺潟が此の附近まで擴まり居たる一の證據となるかと思ふ。

次に地形上の證據と云ふは遺跡地たる洪積層臺

地の下段沖積地の水田面が海面上僅かに十米に過ぎず、西日本海の海面より一旦高距三〇・三米須賀神社の森を最高點とする幅約二―四軒、海岸を蜿蜒する砂丘帯が高まれる後、砂丘帯東麓に於て陸地は再び海面上五米未滿の水準面に降り其れより東方約四軒洪積層臺地の西麓に至るまで殆んど水平に近き平面を有し、之れを潟の埋没による生成となして毫も矛盾なき事實である。海岸砂丘の生成により其の背後に生せる潟の多き事實は既に本年七月號の「歴史と地理」誌上に述べたる如くで、現に遺跡の南部にも福島潟初め多くの潟が存在し、而して此所に徳川時代中葉まで舊紫雲寺潟なるものが存し、其の汀線と臺地直下の沖積地とが高度に於て僅かに五米の差（二萬五千分一地形圖による）を有するに過ぎないとすれば石器時代舊紫雲寺潟の汀線が臺地直下の附近まで及んで居たと考へて大なる誤ではないだらう。

尙金塚村相馬に於て十年餘以前より天然瓦斯を噴出せる事實（十七乃至十八間の深所より水と共に瓦斯噴出し、土人タンクを用ひて之れを貯留し點燈並びに炊事に利用し又湯殿燃料として使用した、現在にても鑿井すれば噴出するも設備に多少の費用を要するを以て之を實用に供するは現在僅かに二戸で澁木孫一氏のみ稍完全に之れを利用して居る、又掘切にては約二十年以前錢湯に於て之れを利用した事があつた）及び彌彦岡に於て以前鑿井の際多量の地下水湧出し周圍の地盤陥落したるの事實も又其の附近の地が舊紫雲寺潟潟底に當れるを示すものであらう。信州諏訪湖、若狭三方湖、加賀河北潟殊に後者に於ける例より考へ、該天然瓦斯は舊紫雲寺潟底部に於ける有機物の分解によつて生ずる沼氣瓦斯（Swamp or marsh gas）の類と思はれ、（之れに關する研究は未遂であり、新潟村上兩圖幅地質説明書、大正十四年一月發行

新潟縣村上油田地質及地形圖說明書にも記載されて居ないので確かな事は云へず殊に此の附近は有名なる第三紀層石油包含地であるから其れと關係あるものなるやも知れず後の研究を俟たなければならぬ(彌彦岡に於ける多量の地下水の湧出地盤の陥没と併せ考へれば此の附近の地は普通の新潟地ではなく舊潟底沈積物よりなる軟弱なる地盤であつて舊紫雲寺潟は以前は彌彦岡より相馬附近まで擴まり、従つて現在に於ける同高線の追求により明かなる如く、貝塚は該潟岸に接近して位置したものと考へられるのである。

新潟圖幅地質說明書(大正六年十二月發行、河野密、渡邊久吉)村上圖幅地質說明書(大正二年十一月發行、河野密)によれば新潟圖幅地に於ては越後平野の沖積層地下八十間内外の砂層に可燃性瓦斯を含蓄し地下水と共に噴出、新潟市及び福島潟附近に於て燈火用、燃料、發動機動力用に

供し、又砂丘地よりも冷泉に伴ひ同質の瓦斯噴出し新潟市の西端關屋鑛泉附近に於て利用せられる(新潟市地下八十間の砂層には豆大礫を含むが之れより上部より噴出するものは比較的少量である)(四七頁、二一九頁)との事であり、村上圖幅地に於ても砂丘より可燃性瓦斯及び冷鑛泉を噴湧出し(三五頁)岩船郡岩船町、西神納村大字南田中、平林村大字北新保及び新飯田、北蒲原郡築地町、及び並槻の沖積地より放散するものは大部分沼氣で燃料燈火用に供せられ、築地の南と西、笹山鑛泉の砂丘中よりも同瓦斯を噴出し燃料に供せられ胎内川砂礫中よりも同瓦斯を噴出するとの事であり(七五―七六頁)又新潟縣村上油田地質及地形圖說明書によれば中條町追分附近の二箇所に沖積層より瓦斯を噴出するとの事である(一四頁)が相馬の天然瓦斯に就ては記載する所なく、又上記諸地點噴出天然瓦斯の起原が如何なるものであるかの

精密なる研究は餘り進めて居ない。此の點に於て

理學士上床國夫氏の研究（本邦に於けるヘリウム

含有天然瓦斯の研究、地質學雜誌第三十一卷大正

十三年九月及十一月號）は出色のものであるから

氏の研究によるに山形縣鶴岡盆地、新潟縣蒲原平

野、諏訪湖畔、福井縣三方、琵琶湖畔、鹿兒島灣

沿岸、東京羽田附近等第四紀地層の炭化水素型瓦

斯は炭化水素化合物としてはメタンを多量に含有

し其の他無水炭酸、窒素の微量を含有しメタン以

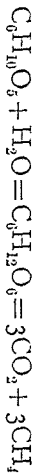
外の炭化水素化合物たるエタン及び重炭化水素及

び酸化炭素は含有しないとの事であるが、相馬噴

出の天然瓦斯は恐らく上床氏の所謂炭化水素型天

然瓦斯即ち普通に所謂沼氣瓦斯に屬し、其の生因

は、



なる化學式を以て示さるゝ生物化學作用による有

機物の分解にあると思はれる。然らば此れを舊潟

底沈積物の分解物として不可なからう。

相馬噴出の天然瓦斯が果して潟底沈積物の分解

によつて生ずる沼氣瓦斯であるとしても其の地が

石器時代に於て潟であつたとの直接の證據にはな

らぬが（前述の地質上地形上の證據も同軌である）

本遺跡地より錘石及び蜆貝を出土するの事實と併

せ考へるならば此等の事實はかなり有力なる證據

となると思ふ。

斯くの如く一方に地質上の證據、他方に地形上

の證據があり又天然瓦斯の噴出等多少の副證（之

れを地質上の證據中に包括するも不可なし）もあ

り此等を併せ考へるならば他の遺跡地は如何様で

もあれ本遺跡地が石器時代に於て舊紫雲寺潟汀線

附近に位置して居たとの考へは大して事實に遠い

空想ではないと考へられる。何は兎もあれ當時此

の地の住民は網を以て魚を獲り（矢を以て獸を狩

る等と同時に）又蜆蛤を捕つて生活して居た事だ

けは確である。

次に此の遺物の示す興味ある事實は石器時代に於て日本海沿岸の砂丘が既に成生して居た事實である。即ち本遺跡より蜆貝を出土する事實は、本遺跡地住民の貝を捕れる水面が外海でなく半鹹半淡の水面であつた事を示す、宮下氏の言の如く蛤を出土したとしても尙半鹹半淡の水面であつた事を示す、即ち此の水面は既に最早や海水面ではなく入江又は潟であつた事を示す。而して此の水面が既に潟であつたとするには此の海岸に既に砂丘少くとも海面に達する砂洲が發達して居た事を假定しなければならぬ。即ち此の一帶の海岸の如き地質的地形的條件を具有する所で半鹹半淡水を擁せしめたものは現今砂丘の基盤或は前身たる砂洲以外にあり得ないのである。(砂丘を戴く砂洲ならば一層よい)而して繩紋土器包含の遺跡は石器時代遺跡中でも比較的古い時代のものとしなけ

ればならない事略學界の定説(最近長崎縣有喜貝塚發掘の示す事實によれば絶對的ではないが)の如くであるが若し然りとすれば第四紀新層に屬する砂洲地の生成は案外に古く、繩紋土器使用時代以前に溯る事が明かとなる。此の事實はかなり興味ある事實で、日本海沿岸の他の海岸沖積地殊に砂洲地研究に一の參考事實を供するものである。日本海沿岸砂丘自身の上に彌生式土器及び少數の繩紋土器を伴ふ石器類を發見する事は加賀國河北潟西岸内灘村、丹後國石濱、因幡濱坂等の砂丘地に於て既知の事實であり(石川縣史蹟名勝調查報告第一輯及び北陸人類學會誌第一編、京都府史蹟勝地調查會報告第二、第三冊、鳥取縣史蹟勝地調查報告第一冊參照)日本海沿岸砂丘の生成が案外古き時代に屬する事は以前より知られて居た事であるが其の考へを更に裏書して砂洲が純粹の繩紋土器使用時代以前の生成に係る事を本遺跡地

の研究が明かにした譯である。即ち若し假りに内灘村向粟ヶ崎發見宇野富良氏所藏の繩紋土器破片十五個、函石濱出土、文學士辰馬悅藏氏所見の繩紋土器破片一個（接合して）は當該地發見彌生式土器の數量に比し極めて少數であり、濱坂發見の古式土器一片は單に繩紋土器に近き手法を示すと云ふに止るから此等砂丘上の遺跡が純粹の繩紋土器使用時代の遺跡ではなく稍新らしきもの從つて砂丘自身も場合により繩紋土器使用時代よりは稍新らしきものと考へなければならぬとしても其の基盤若しくは前身たる砂洲は更に古き時代即ち彌生式土器使用時代以前の生成と考へなければならぬのであるが本遺跡地の研究は此の考へを實的に確證したるもので之れやがて純粹の繩紋土器使用時代の遺跡たる本遺跡の價値を相當大ならしめる所以である。

以上説述する所によつて繩紋土器使用の時代に

於て本遺跡地附近に恐らく半鹹半淡の潟湖が存し（其れが次第に萎縮して後代の紫雲寺潟となつた）該潟湖と日本海との間には既に或は砂丘、少くとも砂洲の存在した事實が略明かとなつたと思ふ。茲に本遺跡地の地理的考察により明かとなつた石器時代に於ける舊紫雲寺潟が水平的地形上如何なる範圍まで擴まり該地方に如何なる景觀を賦與し地理的條件として如何なる效果を人類に與へたか又其の流入河川、排水口の情態は如何なりしか等の問題は續いて起る興味ある問題であるが此等に就ては不日何等かの説明を試みる筈で本遺跡地に關する説述は今日之れに止め以下直ちに羽後國南秋田郡潟西村字角間崎遺跡に就て地理學上の立場より二三氣着きたる點を概説し簡略に本篇を纏める事とする。（一九二五、一一、三〇）